喜ばれた細かな心配り

森山茂夫さん（小境）

太田にスキー場を始めた当時は、農家ばかりの村に都会からお客さんに来てもらうわけだから、いろいろ大変でした。

お客さんに「トイレはどこですか」と聞かれても、民宿の主人はトイレが何の事なのかわからずに砥石（といし）の入れ物を出してきたり、今度は「お手洗いは」と聞かれて、手を洗うのに冷たい水では気の毒だからと、お客さんを風呂へ案内して、ふたを開けて「どうぞ」なんて言うもんだから、お客さんもびっくりしちゃってねえ。

だけどやり方がわからないなりに、お客さんにどうやったら喜んでもらえるか、みんなで知恵を絞りましたよ。当時、民宿では1部屋に泊める人数は3人までという申し合わせをしていました。どうして3人かと言うと、お客さんがコタツに4人で座ってしまうと宿の人がお客さんにお茶をいれる場所がなくなってしまいますからね。どうしてもお茶をいれてあげたいと、その場所を空けておくために3人と決めていたんです。そんな細かい心配りが喜ばれて、民宿には都会から多くのお客さんが来てくれるようになりました。

最近は、どこもお客さんが減って困っていますが、もう一度原点に戻って、心からのおもてなしをすれば、また少しずつ民宿にお客さんが来てくれるようになるんじゃないでしょうか。

早朝3時からの除雪作業。正面のライトは除雪ブルドーザーのもの。
まだ除雪されていない道路をしっかりと映し出して市民生活を支える。

雪の章

雪は天からの授かりもの。克雪から、雪に親しみ、雪と楽しむ暮らしへ。

豪雪の克服を目指して…降り積もる雪との闘いの歴史

いま私たちは、雪を活用し、共存して生活をしています。しかし豪雪地飯山でこのような暮らしができるようになるまでには、降り積もる雪と格闘した長い歴史がありました。幾度も記録的な大雪に見舞われ、飯山線が数日間にわたり運休することもありました。ラッセル車さえ立ち往生する大雪に自衛隊まで出動したことを記憶している方も多いでしょう。

今では機械による道路除雪が当たり前のように行われていますが、昔は朝昼夜の一日三回、かんじきで自宅から隣家までの道を踏み固め、集落間は当番で道ふみをするなど、人の手で除雪が行われていました。ブルドーザーによる除雪が始まるのは昭和三十三年から。当時のオペレーターは、吹雪で前が見えなくなってくると運転室の幌を開け、全身雪まみれになっての作業を早朝から夕方まで続けることもあったといいます。

その後の自動車の普及とともに高まる除雪要望に応えるべく体制の充実が進められ、現在私たちは大雪の朝でも安心して通行できるようになったのです。

スキーを観光資源に！豪雪を活用する逆転の発想

昭和三十年代になると、スキーを観光資源として活用しようと考えるようになります。当時の農家は、わら製品の製造を主とする冬期の副業や、出稼ぎで収入を得ていましたが、ナイロン製品の普及や、出稼ぎで残された家族の苦労などの問題がありました。この状況を改善しようと、太田や外様、柳原ではスキー場開発とスキー民宿が考えられたのです。

ほとんど農家ばかりの地域で、観光を始めることにどれだけ苦労があったかは想像に難くありません。皆、宣伝方法や民宿の衛生面での施設改善などで戸惑いながらも、問題を解決していきました。

そして昭和三十五年、太田スキー場に地元資本として第一号のリフトが建設されると、その後次々と各スキー場にリフトが建設され、本格的な地元資本の民宿スキー場がいくつも誕生しました。これに加えて、北竜湖、斑尾などには外部資本のスキー場が開発され、飯山は一大スキー観光地の仲間入りを果たしたのです。この効果は観光面だけでなく、冬期間の雇用の場としてもその役割は非常に大きなものでした。しかし近年の全国的なスキー離れは、スキー場の閉鎖など飯山にも深刻な影響を及ぼしており、現在その打開のための取り組みがされているところです。

雪はいいやまの「宝」利雪の取り組みが広がっています

スキー以外でも昭和五十八年から開催されている「いいやま雪まつり」も商工会議所青年部が中心となって利雪を呼びかけてきたもので、平成十六年で二十二回を数える市民参加のイベントとして根付いています。また信濃平の「かまくらまつり」や利雪農業の研究など新たな取り組みも始まっています。

確かに雪は生活していく上で、ハンディかもしれません。しかし飯山にとってはなくてはならない「宝」でもあるのです。

水害と闘ったあの頃

池田節子さん（天神堂）

昭和57年の木島水害で、酪農用の牛を多く失いました。

水害当日の朝は、堤防が切れる前に牛の搾乳だけでも済ませてしまおうと、主人と慌てて牛舎で作業を始めたんです。でも、搾乳し終わる前に水が襲ってきてしまい、怖くなって母屋に逃げ込みました。水の勢いはものすごく、家の前の道路のアスファルトが割れて浮き上がって牛舎に向かって流れてきたほどです。

昭和34年の水害では、牛は頭を水から出して呼吸できたと聞いていました。でも今回は、牛舎から「グウー」という、それまで聞いたこともないような牛のうめき声が聞こえました。水を飲んでもがき苦しんでいるんです。自分で綱を切って、何とか牛舎から逃れた牛も、りんごの木にかけられた網に足を捕られて溺れたり、陸に辿り着いてから力尽きて死んでしまいました。

水がひけた牛舎に戻ると、綱を付けたままの牛が、水を飲んで腹がパンパンに膨れた状態で並んで死んでいました。

酪農で生活を支えていましたから、そんな光景を前にして、やりきれない思いだけが残りました。水害後、主人は「俺の取り柄は、牛しかねえんだ」と言って、借金してようやく酪農を再開したんです。その酪農をやめて今年で10年たちました。

川の章

喜びも厳しさも悠久の大河とともに。知恵と努力で潤いのある水辺景観都市へ。

市民生活に身近な千曲川 渇水を心配せず飲用水を供給

子どもの頃、千曲川のせせらぎで、真っ黒になるまで泳ぎ遊んだことを記憶しておられる人は多いと思います。または、魚釣りに出かけ、わくわくしながら大物を狙っていたあの日のことを…。

飯山市を南北に縦断する千曲川は、常に市民生活に身近な存在でした。古くは、江戸時代から明治時代にかけて、越後と上田方面との交易路として、塩や海産物、穀類など通船による物資の輸送に盛んに利用されました。

明治二十一年に信越本線が直江津から軽井沢まで開通し、輸送手段が陸路主流になるまで、こうした千曲川を利用した輸送は続きました。

時代を隔てた昭和四十三年、千曲川が急速に私たちの生活に入り込んだ出来事がありました。上水道水源として千曲川からの取水を開始したことです。それまで利用してきた地下水では、増大する水需要に対応できない時代を迎えたのです。千曲川は豊富な水量を誇り、水源を再び地下水に切り替える平成十四年まで、長い間、夏場の渇水を心配せずに十分な水を市民に供給してくれました。

繰り返し襲った洪水の恐怖 二度と切れない堤防が悲願に

穏やかで優しい流れを見せる千曲川。そのゆったりした流れに私たちは癒されもするのですが、増水時の荒れ狂う様子を、住民は忘れることはできません。流域を何度も襲った洪水の恐怖です。台風の襲来に伴う豪雨は、千曲川あるいは支流の樽川堤防を決壊させ、家屋は泥の海に沈み、多くの家畜の生命を奪うとともに農産物へ大被害をもたらしました。大洪水は、昭和に入ってからだけでも二十年、三十四年、五十七年、五十八年と繰り返し発生しています。その度に、沿岸の主に木島、常盤両地区は、襲い来る濁流に徹底的に打ちのめされました。

こうした悪夢のような度重なる大水害を経験したことで、二度と切れない堤防を求める住民の切実な声が高まりました。そして国に対して積極的に陳情した結果、千曲川・樽川ともに「激甚水害対策事業」の指定を受け、より強固な堤防築堤に向けた大規模改修が進められたのでした。

変化に富む水辺環境に注目 見直したい千曲川との関わり

しかし、千曲川の悠久の流れは、住民に拭いがたい災害の爪あとだけを植え付けたわけではありません。人と川との密接なかかわりを取り戻し、日常生活の中で再び川と向き合おうとする動きが近年、見られるようになりました。

特に、飯山市を流れる千曲川の河岸は、大規模な改修工事による人の手がそれほど加えられておらず、変化に富んだ水辺環境が今も残された自然の宝庫です。そして、数多くの植物や鳥類が生息し、豊かな生態系を維持しています。

こうした自然豊かな環境が見直されたこともあって、カヌーや船下りを利用して、気軽に千曲川と親しむ人の姿も目立つようになりました。水面から見える河岸の光景に、今まで知らなかった千曲川の姿を発見する人も多いことでしょう。

今、千曲川堤防では、市民の参加を得て桜の植樹を進め、桜堤の整備が続けられています。

潤いのある水辺環境を将来にわたって維持し、千曲川と良好な関係を築き上げることが、千曲川流域に暮らす私たちには不可欠なことなのかもしれません。

田を守り続けた日々

高橋邦夫さん（南条）

旭区長を務めていた頃、用水管理は大切な仕事のひとつでした。水の少ない時代です。干ばつの際には、取水先の沼の池さえ干上がることも多く、用水路の下流まで水が届かないこともしばしばでした。

みんな昼間は農作業に追われていますから、田に入れる水は夜水といって、夜中に入れに行きます。それぞれが決められた分量を守って水を入れればいいんですが、つい欲が出て、自分の田には多く入れようとします。ですから、水を巡るいざこざが絶えなかった。私も当時は唯一の娯楽だった盆踊りが終わる11時頃、夜水に行く友達と一緒に、月明かりを頼りに田の水を見に行ったことが思い出されます。田に着くと、マッチを擦ってそっと水を確認したものです。

私の田は湿田でしたから、干ばつに悩まされることはありませんでした。しかし反対に、近くの広井川の排水路が十分整備されておらず、少しの雨でもすぐに氾濫して、田んぼを水没させてしまいました。そんなぬかるんだ田では、稲刈りの時期でも、せっかく導入したコンバインが使いものにならず、圃（ほ）場整備の必要性を強く感じたものです。

そんな苦労を経験していますから、圃（ほ）場整備のありがたさは身に染みて感じています。圃場整備されていなかったら、今頃、田んぼを耕す人はいなかっただろうと思いますね。

土の章

緑なす豊穣のふるさと。心から安心できる食への挑戦は続きます。

人力頼みの小規模水稲栽培から大型機械導入可能な圃場へ変貌

盛夏ともなれば都会からやってくる多くのハンググライダーが盛んに飛び立つ鷹落山。展望台から長峰丘陵周辺の盆地を望むと、一帯を整然と区画整備された田園がどこまでも広がり、緑の大地が目に眩しいほどです。

この風景ができるまでには、農家はもちろん、地域を挙げての大きな取り組みがあったことを忘れるわけにはいきません。

飯山市の歴史を振り返ると、時代の波に翻弄される農家の歴史が見えてきます。飯山市農業は、長い間、稲作中心の農業でした。小さな田んぼが連なり、人力に頼る田植え、稲刈りは大変な重労働でした。生産量を増やし作業効率を高めるためにも、小規模で入り組む田んぼを集約して、大区画の田んぼへと改良することが必要でした。また、用排水路の改良と湿田乾燥化を進めるという当時としては夢としか思えない大きな課題もありました。昭和二十七年には、「長野県下水内中部土地改良区」が発足、また、「木島土地改良区」の発足がこれに続き、土地改良を進めるため一歩を踏み出しました。諸課題を抱えながらの遅々とした歩みではありましたが、事業は継続され、昭和四十年から始まる農業構造改善事業、それに続く土地基盤整備事業へと引き継がれていきました。そして、最終的には大型機械導入を可能とする、大区画の圃場と水路が整然と並ぶ現在の姿へと変貌を遂げることができました。

大型機械導入を可能とする農地整備により、水稲栽培は農家の手間を軽減しました。このことは、農家の目を、果樹栽培、酪農、園芸、菌茸類など他品種へと向けさせ、経営の複合化を目指す契機となりました。

景観・環境面での貢献も美しい棚田に全国から注目

しかし、近年では、水田が果たす景観や環境保全面での貢献も見逃せません。一時期耕作放棄されていた山間の棚田が、住民の手で復活し、景観面で高い評価を得ていることも特筆に値します。特に「阿弥陀堂だより」の舞台ともなった福島の三部新田は、農水省の「日本の棚田百選」に選ばれるなど、各方面から注目されるようになりました。

菌茸類が大きく伸長飯山市農業発展への努力続く

昭和三十年代、基幹作物としての水稲のほか、煙草やリンゴ栽培が伸び始め、同時に副業のエノキダケ栽培も農家の収入を支え始めていました。四十年代には食生活の欧米化により米の消費量が減少し、生産調整という形で水稲の経営形態を揺さぶりました。そして副業であったエノキダケ栽培が、出稼ぎ問題や過疎対策という視点から積極的な推進が図られ、通年栽培が可能となったことから驚異的な伸長を遂げました。エノキダケ栽培はその後、ブナシメジ・ナメコ・ヒラタケなどの栽培に発展し、ブナシメジを中心とする菌茸類は飯山市の農業粗生産額の過半を占めるまでに至りました。もうひとつの基幹作物に成長したアスパラガスも、全国最大の一大産地を形成しています。

「安全で安心」な農産物を心を込めて生産することこそ、飯山市農業が生き抜くための道。そんな思いを胸に、飯山市農業が発展を続けていくための努力が今も懸命に行われています。

人の輪がブナ林を守った

高橋博幸さん（温井）

営林署が鍋倉山国有林のブナ伐採を計画していると聞いて、当時温井区長だった私は、泡食ってあちこち確認に出向きました。その2年ほど前から温井区の共有林に林道を開けたいとは聞いていましたが、ブナ林を全部伐採するというのは寝耳に水でしたから。ブナを切られてしまえば、里の生活用水や農業用水が枯れてしまい、生活できません。

計画が事実だと分かり、反対運動を展開しました。しかし、国を相手の反対運動ですから、地元には「やっても無駄」という諦めムードも強かったですね。それでも「何とかしなくては」と必死な思いでしたよ。そんな時、鍋倉山が好きで、自分たちが建てた山小屋に日頃通っていた社会人グループの皆さんの助言もあり、テレビ局、新聞社などマスコミに訴えることで世論を味方につけることにしました。その結果、想像以上の反響があり、3年間で2000人を超える人が訪れたんです。その人たちを鍋倉山に案内したり、反対運動の輪を地元でも広げるために「ブナ林観察会」を作って活動したんですよ。

鍋倉山には、百年以上も前に地元の炭焼きの人が彫ったと思われる「水」と刻まれたブナが見つかっています。山の木々が水を育むのですから、木を守ることは切実な願いだったのでしょう。

今後の山利用は、地元もよかった、訪れた人もよかった、という共感を得られる形にできればいいと思いますね。

山の章

豊かな糧を与えあう山と里。その素晴らしい関係をさらにいつまでも。

全国的な開発ブーム背景に外部資本による開発が活発化

かつて、田畑の少ない家では、山で伐採した木々を炭焼きして収入を得たり、一般家庭でも燃料として薪を大量に使うなど、山は里の住民に豊かな生活の糧を与えてきました。

時代が移り変わり、人々が山に望む役割にも変化の兆しが現れ始めました。戸狩、信濃平スキー場の開発を手始めとして、高度経済成長期の全国的な開発ブームを背景に、外部資本を投入してリゾート地化しようとする動きです。飯山市で、その最初の胎動となったのが、文化服装学園による北竜湖スキー場開設と、その後の斑尾高原の大規模開発でした。

この中で斑尾高原の開発は、昭和四十年代初頭に、県が各地で進めていた保健休養地づくりに、民間資本によるスキー場開発が加わり、地元の協力体制を含めた官民一体での大規模な開発が進められたものです。また、斑尾山麓開発道路の開通を機に、外部資本による飯山国際スキー場が開設されるなど、開発を過疎脱却や地域経済の起爆剤としたい地元の思いがふつふつと沸き起こったのでした。

不況で開発路線は曲がり角 ブナ伐採計画めぐり議論紛糾

こうした開発路線が曲がり角を迎えたのが、鍋倉山麓開発計画の二度にわたる挫折でした。昭和四十七年、森永製菓と温井観光協会、それに過疎化の歯止めと雇用確保を期待する市が協力し、三つのゲレンデと十数基のリフト、ホテル等の宿泊施設を建設するという大規模開発を計画しました。しかし、石油ショックによる景気回復の遅れを理由に、森永製菓が開発からの撤退を決定したため、計画は頓挫したのでした。

鍋倉山国有林のブナ原生林が、林野庁による伐採計画をめぐって大きく揺れ動いた出来事がありました。昭和六十一年、飯山営林署が示した計画では、鍋倉山周辺の百五十ヘクタールが伐採の対象地域とされ、関係者からは、災害の発生と水源の枯渇を懸念する声が続出。長野営林局へ計画見直しを陳情するなどした結果、地域の声に配慮する形で伐採計画は変更されたのでした。

一方で、観光利用による地域活性化への熱意も強く、鍋倉山麓開発が再び脚光を浴びる時代が巡ってきました。昭和六十三年には、関田山麓一帯を長期滞在型高原リゾートとして開発を目指す「関田山麓リゾート開発推進協議会」が発足。さらに平成二年には、開発を手がける「㈱飯山リゾート」が飯山市と日商岩井㈱、清水建設㈱による第三セクター会社として設立されました。

しかし、折しも、時代はバブル経済崩壊直後。出資企業の開発意欲は削がれ、事業着手寸前だった開発計画は遂に撤回を余儀なくされるに至ったのです。その後、現在まで新たな大規模開発構想は影を潜めました。

山利用のあり方は大きく変化 末永く共存できる仕組み模索

時代に即した新たな山利用のプランの一つとして、鍋倉山のふもとに「森の家」が誕生したのは平成九年のことでした。ありのままの自然を舞台に、体験メニューを提供し誘客を図ろうとする施設であり、従来の大規模開発型の発想とは大きく異なります。また、斑尾山と鍋倉山を含む全長50㎞にもおよぶ長大なトレッキングルートを整備し、地元の雇用創出と地域振興につなげようという計画が現在進んでいます。

この数十年、山や自然に対する住民意識は大きく変わりました。そんな人々の思惑とは別に、山々は依然として、住民の身近にどっしりと構えています。これまでの山利用の歩みを振り返り、自然と末永く共存できる仕組みづくりを模索する時代に入っています。